

とってかけがえない経験となった。博士号取得時にいただいた“try not to get comfortable”というアドバイスを胸に、常に上を目指すような心がけている。

留学を通じて何を学ぶのか

五年間のウィスコンシンでの生活を振り返り、私はいま、留学は「心」に力をつけ、人間の幅、深みを引き出してくれる絶好の機会だと確信している。言うまでもないが、海外で勉強をするということは、言語、文化、習慣が異なる場所での生活をしなければいけないということである。自国にいれば当たり前にできることができないという環境では、ものごと一つひとつがかけがえない体験となる。また、国や文化の枠組みを超えて、人々と交流、相互理解をすることで、人として多くを学ぶ機会となる。

また、この留学を通じて私が一番に感じていることは、「出会い」の大切さである。自分がいまこうして研究、教育活動を行えるのも、すべては人との出会いによってなされたものである。とりわけ、素晴らしい多くの師や友人たちに恵まれたことが、いまの自分を築きあげてくれ

たのだと思っている。社会、人生、そして個人の関係のあり方を真剣に考える人々と出会い、ともに考え、ともに悩み、そしてともに喜び、心に大きな力をつけることができたのが、留学を通じて得られた何よりの宝だと思う。自分の専門分野を国際的なレベルで学べることが留学による成果の一つであることは言うまでもないが、留学にはそれ以上の「効用」があり、それこそが留学の醍醐味なのだと思う。

国際的な環境の中で

現在は、国際大学でアシスタントプロフェッサーとして研究、教育活動に携わっている。国際大学は、財界、教育界の支援により設立された日本初の大学院大学で、国際水準の高い研究、教育を行っている。その特色は名前どおり、国際的な教育・研究環境にある。学生の大部分は留学生で、四〇カ国以上のバックグラウンドが異なる多様な学生が高い問題意識を持ち切磋琢磨している。また、キャンパス内での公用語は英語であり、すべての講義は言うまでもなく、教員同士また学生との会話も英語で行われている。

私の専門分野はマクロ経済学および労働経済学で、とりわけ雇用・失業問題に関心を持っている。経済社会のグローバル化、技術革新の進展、あるいは不況の影響で主要先進諸国は高失業を体験するなど雇用問題は各国ともに最大の関心事項となっており、経済分析と政策の両面において注目されている。また、雇用・失業問題は単に働いている人だけの問題ではなく、経済社会の要であり、社会安定の基礎的条件でもある。いまは経済成長と失業の関係および景気循環上の労働市場の動きについて理論、実証の両面から研究を進めている。

帰国後もこのような国際的な環境に身を置いて研究、教育活動が行えるのも、また多くの出会いを通じて人間としてさまざまなことを学ぶ機会が得られたことも、国際文化教育交流財団ならびに日本万国博覧会記念機構からの援助があったからにはかならない。ここに期して深甚の謝意を申しあげる次第である。また、今後、日本経済、世界経済、またわが国と諸外国の国際交流に貢献することが、ご援助に報いることと思う。今後、精一杯の力を尽くしていきたい。

留学の効用

国際文化教育交流財団二〇〇四年年度奨学生。二〇〇〇年慶應義塾大学経済学部卒業。二〇〇二年同大学院経済学研究所前期博士課程修了。二〇〇四年より二〇〇九年まで米国ウイスコンシン大学マディソン校に留学。二〇〇九年同校より博士号(経済学)取得。この間、日本労働研究機構研究助手、慶應義塾大学経済学部助教、総務省客員研究官を歴任。二〇〇九年より現職。専門はマクロ経済学および労働経済学。

国際文化教育交流財団二〇〇四年年度奨学生。二〇〇〇年慶應義塾大学経済学部卒業。二〇〇二年同大学院経済学研究所前期博士課程修了。二〇〇四年より二〇〇九年まで米国ウイスコンシン大学マディソン校に留学。二〇〇九年同校より博士号(経済学)取得。この間、日本労働研究機構研究助手、慶應義塾大学経済学部助教、総務省客員研究官を歴任。二〇〇九年より現職。専門はマクロ経済学および労働経済学。

単に決めることはできなかった。特に、ある大学には自分が留学先で研究したいと思っていた分野の先生がいたこともあり、その大学に行くべきかどうか迷ったが、最終的には自分の恩師の母校であるウイスコンシン大学を選んだ。



みやもと ひろあき

➤ウイスコンシンにて

二〇〇四年の夏から五年間、米国ウイスコンシン大学マディソン校に留学をさせていただくまたとない機会を得た。留学のきっかけは大学院時代の二人の恩師との出会いであった。「自分の世界を広げるためには国際的な場に出て、世界の俊秀の隣で勉強すべきだ」という先生方の勧めがあり、留学を決意した。自分の将来を託せると思える指導教授に出会えたことは何よりの宝だと思っている。お二人とはいまでも交流が続いているが、研究者としても教師としてもこの二人の先生は私にとって尊敬すべき大きな目標であり続けている。

留学に際し、ありがたいことにいくつかの大学から入学許可をいただくことができた。どの大学も魅力的で行き先を簡

ウイスコンシン大学では世界の経済学界をリードする大家が教鞭をとっており、また、全米ならびに世界各国から進取の精神に富んだ学生が参集し、研究活動を行うには極めて魅力的な環境を備えていた。他の大学院がそうであるように、ウイスコンシン大学でも、一年目にコースワークと呼ばれる経済学の必修科目の授業が行われ、二年目から専門科目の授業

国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三十一カ国の大学・大学院へ一七九名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三十七カ国五一六名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

ならびに個人の研究活動が始まる。一年目の終わりにはプレリムと呼ばれる必修科目の試験があり、私はその試験を通過するまでに大変苦戦をしたことをいまでもよく覚えている。

二年目に入り、専門分野の研究を開始する際に、他大学から私が研究したいと思っていた分野の経済学者がウイスコンシン大学に移籍してきた。その人こそ、私が留学先を決定する際に候補とした前述の大学の先生であった。私はそれこそ、神様が引き寄せてくださった人だと思った。迷わず先生の研究室の門を叩き、指導教授になっていただいた。指導教授のR・レンツ先生は若手の新進気鋭の労働経済学者で、学問に対して非常に厳格であった。研究に対する姿勢とは対照的に、その人柄は穏やかであたたかく、常に親身になって指導をしてくださった。素晴らしい先生のもとで学べた四年間は私に